

長野県

民俗の会通信

第303号

○安曇野 現在家族の食卓から(第二四一回例会での事例報告より) …… 宮本 尚子
○諏訪市木遣り保存会「木遣りの集い」参加記 …… 太田 真理

安曇野 現在家族の食卓から(第二四一回例会での事例報告より)

宮本 尚子

はじめに

現在、筆者は勤務先の博物館で令和七年春に開催する食をテーマにした企画展を準備している。その小テーマの一つとして「食とイエ」を考えており、今回はその調査からいくつかの事例報告に若干の考察を加えて発表したい。

食と民俗というと、ハレとケ、特にハレの食としての儀礼食や伝統食などがクローズアップされることが多い。儀礼食といえば、安曇野市域であれば、エゴ、七夕まんじゅう、正月の芋汁、祭りの客呼びや産婦に出された鯉のうま煮などがそれにあたり、いわゆる「ごちそう」でもある。また、現在のように流通が発達しておらず、手に入れられる食材が限られていた頃は、例えば、夏には夏の旬の野菜であるナスの鉄火やキュウリと塩イカ(1)の酢の物といった伝統食と呼ばれる献立が頻繁に食卓に上った。こうした儀礼食・伝統食といわれる献立は、地域ごとの特色もあるが、基本的にはイエ単位で伝えられるものである。

伝えられるのは献立だけではなく、それに伴う食糧の生産・調達・調理・分配もあり、さらには味覚の伝承も含まれるだろう。

当たり前だが、食べることは生理的欲求であり、生命を維持するために必要な行為でもある。特別なことがない限り、誰もが食べ続けなければならぬし、食べることで、そのイエの食文化を継承しているとも言える。しかし、上位世代から継承した献立や味覚を家人や下位世代に伝承する役割を担っているのは、献立を考え料理する人ではないだろうか。現在、イエの献立や味覚はどう伝えられているのか。或いは伝えられていないのか。そこにどんな意識があるのか、食事作りをしている方に聞き取り調査をした事例から考えてみたい。

1 現在の食生活

事例を紹介する前に現在の食生活の様相がどのようなものか、ざっとみてみたい。

・季節・時間を問わず手に入る多様な食材がある。

・テレビ・新聞・雑誌・ネットメディアなど、あらゆる媒体に食に関する情報があふれている。

・出来合いのものをいつでも買って食べてきたり(中食)、レストランなどへ行き、好きなものを外食できる。

現在は、金銭的に余裕があれば、という前提があるものの、基本的に食べたいものを、いつでもどこでも食べることができるとし、食べたくないものは、食べないという選択肢も選ぶことができる。好き嫌いなどの嗜好性による選択や、健康志向やダイエット志向などによる選択もできる。儀礼食や伝統食が特別ということはなく、ケハレの境界はあいまいである。個人の嗜好による個人単位での消費が、現在の食生活の姿だとすると、イエの食文化は、ほとんど伝承されていないのではないだろうか。

2 事例報告

最初に、かつてのイエの食の継承がどんなかたちでされていたのかを見ていきたい。参考となる昭和三〇年代の事例を紹介する。

事例1 A家(明科東川手峰方)昭和三〇年代

話者 A夫妻(S三五結婚) 夫(S五生) 妻(S一一生 池田町中之郷出身)

◇事務局から

令和六年度の会費納入がまだの方は納入をお願いします。会費の前納にご協力願います。また、令和五年度以前の会費を未納の皆様は、急ぎ納入をお願いします。

◇受贈図書

○『伊那民俗研究』三一(柳田國男記念伊那民俗学研究所)

・伊藤好英「折口信夫・池田彌三郎と信・遠・三山間地域の研究」などを掲載

○『みどりのこえ』六八(長野県環境保全研究所)

○『MGプレス』二〇二四・三・二二付
・村上研志「初めての講演 懐の深い民俗学」を掲載

○富山市民俗民芸村 村報『民村』vol.10
(富山市民俗民芸村(管理センター))

○『郡境域から見続けた「上」伊那』三石稔
二〇二四 自家刊行

○『水と村の歴史―信州農村開発史研究所紀要―』三五・三六・三七(信州農村開発史研究所)

○『信州農村開発史研究所報』一六六・一六七(信州農村開発史研究所)

○『世界遺産 富士山』第6集(山梨県立富士山世界遺産センター)

・堀内眞「富士御師が頒布した御影と牛王」などを掲載

○『世界遺産 富士山』第7集(山梨県立富士山世界遺産センター)

山世界遺産センター)

・堀内眞「書承」と「口承」のあいだ―道がつなぐ富士信仰―などを掲載

○『富士信仰の広がり―東国・北国・西国―』(山梨県立富士山世界遺産センター)

・信州にのこる川口御師が頒布した「庚申神」などの記事を掲載

○『民俗文化』三五(近畿大学民俗学研究所)

○『歴史民俗研究 第二二回櫻井徳太郎賞受賞論文・作文集』(板橋区教育委員会)

○『近畿民俗』一九〇(近畿民俗学会)

○『歴史民俗資料学研究』二一九(神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科)

○『民俗学研究所紀要』四八(成城大学民俗学研究所)

・福田アジオ「生活のムラと支配の村―近世村落の民俗学―」

・松崎憲三「送る人形、立てる人形―鹿島信仰とのかかわりから―」などを掲載

○『民俗学研究所ニュース』一四四・一四五(成城大学民俗学研究所)

・松崎憲三「文面による神仏との交信」などを掲載(一四四)

○『現在学研究』一三(現在学研究会)

・倉石美都「人との繋がりの変化―センチルカフェから「個」を考える―」

・佐野賢治「郷土」研究から「現在」学へ―地に根ざした倉石民俗学―」

・和崎春日「倉石忠彦の精神と哲理―「都市民俗学」に聖心の学を認め継ぐ―」などを

掲載

○『通信上田盆地』四一(上田民俗研究会)

・令和二(二〇二〇)年『上田盆地』第四五号を発行してからの活動再開

○『伊那路』八〇七(上伊那郷土研究会)

・伊藤修「犬神碑考(二)―伊那谷の犬神関係碑―」

・吉田保晴「伊那谷のトキ―民俗の窓を通して(四九)―」

・竹渕修二「わらべ歌は話し言葉が音楽化したものとみていいんじゃない!?―話し言葉とわらべ歌との接点を探って―」

・三石稔「【図説・上伊那の民俗】七九 お高祖頭巾をかぶった双体道祖神(飯島町本郷五中央組)」などを掲載

長野県民俗の会通信三〇三号

二〇二四年九月一日

会費年額 五、〇〇〇円

長野県民俗の会



E-mail: info@nagano-minzoku.chu.jp
URL: http://nagano-minzoku.chu.jp/